

# JAELE Newsletter

## 上越英語教育学会通信

The Joetsu Association of English Language Education

September 5, 2014

No. 11

### 草の根運動

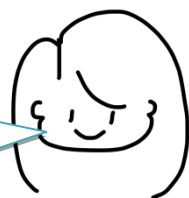


(那須でアルパカ飼育実習中)

上越市立柿崎小学校教諭  
茂木 (も・て・き) 淳子  
(平成 19 年度修了生)

大学院を修了してから 3 校目、通算 8 校目となる柿崎小学校に、この春赴任した。英語が得意ではない私だが、大学院を出てからは、新任式の挨拶は英語ですることにしている。

“Hello!  
I'm Junko MO・TE・KI.  
Nice to meet you!”



私がそう話し出すと、たいてい子どもは(いや、他の教師も)ドン引きする。クスクスと笑い声も漏れる。でも気にしない。しかし、子どもを煙に巻くのが目的ではないので、話の内容が推測できるような絵カードや写真

を片手に話を続ける。こんな挨拶をすると「このお婆さんは英語の先生」だと印象付けることができる。

新学期翌日から、密かに「草の根運動」と自称する外国語活動がスタートする。なんのことはない、朝の挨拶を英語でするだけである。“Good morning!”と。朝、廊下ですれ違う全ての子どもに声をかける。たいていの子どもは、反応ができずフリーズしてしまう。私が通り過ぎると、クスクスと笑い声が漏れることもある。友だちと一緒に歩いているときには「ねえ、何て言ったか、分かんなかった」と話している声が聞こえる。私の“Good morning!”に対して、英語や日本語で「おはようございます」と返してくる強者は、最初はいない。それでもあきらめず、しつこく“Good morning!”をくり返していると、少しずつクスクス笑いが減って、少しずつ子どもから“Good morning!”と返ってくるようになる。ここまでの 1 年。全ての子どもから“Good morning!”が返ってくるのに数年が必要である。もちろん、下校の時にも同じように“See you!”と声をかける。

この言葉は、朝の挨拶に比べたら定着が早い。ほとんどの子が「し、しーゆー」とすぐに反応できるからおもしろい。

私の草の根運動は担任する学級でも行われる。1年生ではあるが、日ごろから英語にさらされているので、どの子も自然に“Good morning!”と返せるし、子どもから“Good morning!”と声をかけてくれることもある。友だちが「おはよう」と言って教室に入ってくれば「おはよう」と日本語で返し、“Good morning!”と入ってくれば“Good morning!”と返す。自然な姿に、微笑ましくなる。さらに、お便りを配るときには“Here you are.”“Thank you.”というやり取りがある。宿題を配っても“Thank you.”と言ってくれるのは、今だけだ。(そのうちに“No, thank you.”と言いつつ出すから…) 休み時間が終わって“Go back to your seat.”と言えば、マッハで座席に戻ろうとする。朝の健康観察も、もちろん英語で。テストを返すとき「満点！すごいね。がんばったね」と日本語で言わなくても、英語でほめたらにこにこ笑顔になる。ごみの分別の仕方を日本語で説明するより、英語で説明した方が間違いが少ない。こんなふうに、子どもの学校生活に自然に英語が蔓延していることが、外国語活動教科化の一助となるのではないかと、淡い期待を抱いている。

## 一刀流

大学院1年 言語系コース（英語）

新井裕史

日本のプロ野球で日本ハムの大谷翔平選手が、投手と野手の両方に取り組む二刀流の選手として注目を集めている。彼は高校時代から脚光を浴びており、打てばホームランを連発する強打者、投げれば160km/hを計測する剛腕ピッチャーだった。プロ野球界に活躍の場を移しても、彼の活躍は留まるどころを知らず、スター選手の仲間入りを果たしつつある。彼は「二刀流」でもその実力を余すところなく発揮しているように見えるが、このような人は稀なのではないだろうか。私もかつて、分野は違うものの二刀流に挑戦したことがあった。

高校3年生の冬。センター試験を終えた私は1つの悩みを抱えていた。思い描いたような結果が残せず、志望校の英語教育専攻に合格することが難しくなったからである。私に残されたのは、2次試験での逆転を狙って出願するか、志望校の別の学科に入学して副免許で英語を取得するか、私立大学の英語教育関係の学部に進むかという3つの選択肢だった。最終的に自分の英語力に自信を持てなかった私は、志望校こそ変えなかったものの、出願する学科を初等教員養成課程に切り替えて受験し、辛くも合格することができた。

しかし、大学入学後に待っていたのは想像していたキャンパスライフとは異なるものだった。初等教員養成課程は他のどの専攻よりも授業が多く、課題の量も多かった。効率よく作業を進めることができない私は、英語学習の時間を捻出することができず、フラストレーションの溜まる日々が続いた。身近な先輩に英語の副免許を取得しようとしている人がおらず、どの授業を履修したらよいのか分からなかったり、学務課に相談しても適切なアドバイスを受けられなかったりということもあり、大学卒業時に英語の免許を取得することさえ叶わなかった。サークルや部活動に入る余裕も無く、人とのつながりも自分の学科の関係者以外に広げることがほとんどできず

に終わってしまった。

大学の全課程が終了するまで半年余りとなった頃、両親から大学院進学の話提案された。英語教育を専門にすることを諦められなかった私は、大学院受験に踏み切った。予め英語教育に関するバックグラウンドを持っている学生を求める大学院が多いなか、上越教育大学大学院は、大学在籍時に英語を専攻していない人に対しても広く門戸を開いているということを知り、ここに入学したいと思った。

大学院に進み英語教育の原理や理論を学び始めたが、本当に興味のあることには没頭できるということを実感した。大学生のときには、レポートや課題に取り組む際、できるだけ早く楽に片づけることを考えていた。初等教員養成課程に在籍しながらも、心のどこかにある「英語を専門にしたい」という思いが邪魔をしていたため、どこか上の空で授業に臨んでいたと思う。故に、授業を通じて学びを深めたり自らの考えを持ったりすることが少なかったと振り返っている。大学院では、心ここにあらずという状態で授業に臨むことはなくなり、集中度や理解度は確実に高くなった。

大げさな表現になってしまうが大学院に入学した私を表現するならば、水を得た魚である。基礎的な英語力が足りない私にとっては、英語で論文や文学作品を読むことは容易なことではない。しかしながら、分からないことを調べたりレジュメを作ったりするのが楽しいのである。こんな感情を大学生の時に抱いたことはなかった。二刀流ではなく、1つのことに打ち込めるようになったからこそ生まれた変化だと思う。

自分には小学校教育と英語教育を二刀流でやっていけるような器用さは無かった。しかし、晴れて英語教育を専門に学び始めた今日では、不器用で効率が悪くても時間をかけてじっくりと学問に取り組むことができる。この素晴らしい環境を活かさない手はない。身の丈に合った「一刀流」で英語教師としての資質を磨いていきたい。

## 忘れてはいけないこと

大学院 2 年 言語系コース (英語)

横山 講平

院生生活も早いもので、もう 2 年目の半分が終わろうとしています。ワールドカップをTVで見ながら、「4年後のワールドカップの時期には、自分はどんな教師になって頑張っているのだろうか」と思い巡らせています。今までの自分の人生を振り返ると、決して順調に過ごしてきた訳ではなく、むしろ、大変だったように感じます。その苦しかった自分の過去を見つめ直し、どうして教師になろうと思ったのか、そして教師になる上で絶対に忘れてはいけない、と誓っていることを述べたいと思います。

自分の学生時代(小学校から高校)を振り返ると、自分は他の子どもに比べると不器用で、飲み込みが遅く、何をやっても怒られる子どもでした。例えば、音楽のリコーダーの授業では、家に帰って何回も練習しなければ出来ませんでした。また、体育では、バレーボールをした時に一人だけうまく出来ず、周りからかなり罵声を浴びたり、いじめられたりしました。当時はかなり悔しい思いを抱きながら、時間がかかってもいいから他の人の何倍も努力してやる、という言葉を目

分に言い聞かせて頑張ってきました。

また、当時自分と関わった教師は好き嫌いで成績をつけたり、騒ぎがあっても知らないふりをしたりする教師でした。自分は学校と教師が嫌いでした。だから当時は教師になろうとは思っていませんでした。しかし、あることをきっかけに、自分の考えが180°変わりました。それは、塾で出会った子どもの手紙でした。

大学時代、教職課程は、親の勧めで履修をしました。しかし教職課程は科目がとて多く、周りの友達が諦めていきました。4年間で単位は取り終え、実習も終わらせ、免許取得の可能な所までいきましたが、実習の厳しさを知り、教師は無理だと諦め半分の気持ちでいました。そんな時に自分の気持ちを変える出来事がありました。学習塾で自分が担当していた小学6年の女の子がやめることになり、手紙をくれました。その子はとても勉強が嫌いで、塾に来ては暴れていました。しかしその子がくれた手紙には、「先生の授業は楽しかった。ありがとう」と書いてありました。この時初めて教えることの充実感と喜びを感じました。そこでもう一度教師を目指そうと思直し、現在に至っています。

もし、あの手紙がなかったら今の自分はなかったと思います。そして教師になるに当たって自分は絶対に忘れてはならないと心に決めていることがあります。それは「子どもたちに対する視点」です。自分は、「できた」「できない」などの最終的な結果だけを判断するのではなく、その人の努力の過程を評価してあげることが大事なのではないか、ということです。また、自分の経験上、出来ない子どもたちの立場や視点に立ち、どのように励まし、助言するべきかを考えることが重要だと思います。

私は学生時代に出会った教師に欠けていた子どもに対する謙虚な視点を忘れずに持ち続けたい。そして常に子どもの心に寄り添い、共に苦しんだり、喜んだりできる教師を目指したい。そのために、今後の学生生活でも、この謙虚な視点は絶対に忘れてはならないと心に刻み、自分の夢を叶えるために、日々努力したいと思っています。

## 人生の岐路にむけて

大学院2年 言語系コース（英語）

大月 悠

私は、上越教育大学の大学院に進学する前、山梨県にある公立大学に通っていました。その頃の私は特に夢を持つこともなく、ただ周りの友人達に置いて行かれないよう、勉強の歩幅を揃えることで何となく安心しながら日々を過ごしていました。卒業論文のテーマについても、特に将来に関係することを考えたわけでもなく、現在の専門とはまるで関係の無い内容に焦点を絞り研究を進めていました。しかしながら、そのようなその場しのぎの学生生活がいつまでも続くはずもなく、私はある時人生の岐路に立たされることとなりました。それは就職活動でした。それまで同じ歩幅で歩んでいた友人達が皆各々の道へと進み始めていく中、私は夢を持たないまま自分の進む道を決断せざるを得ない状況に置かれることになりました。私はこの場面に直面して初めて楽観的に考えていた自分の将来の夢に対し、不安や焦りを抱えながら真剣に向き合うことにな

りました。自分に向いている仕事は何なのか、自分が本当にやりたい仕事は何なのか、ずっとそのように考えながら闇雲に企業の説明会に参加していたことを覚えています。

しかしながら一向に自分に合った企業を見つけることができませんでした。そんな中、岡山で教育に携わる仕事をしている父が、教職に就くのはどうかと私にアドバイスをしてくれました。その時まで考えてもいなかった選択肢に対し私は少し戸惑いましたが、この選択肢について意識するうちに今まで就職活動で見てきた多くの企業には無い魅力に気づきました。努力の見返りが生徒の成長だということ、私自身も生徒と共に人間的に成長することができること、この成長という意味を含め毎日が代わり映えのある仕事であることなど、その魅力を並べるときりがありません。こうして私は教職に就くことを決意しこの大学院へと入学することとなりました。この大学院に入って1年が経ち教育実習などの様々な教職に関わる経験をしましたが、この選択に対して私は全く後悔をしていません。またこの大学院では意識の高い友人や現職の教員の方々に囲まれ、勉強は大変ですが毎日充実した生活を送ることができています。

私は自分が進むべき道を岐路に立たされた直後に見つけることができましたが、これは本当に偶然であり、このような良い選択肢が必ずしも都合よく見つかるわけではないと感じます。もしかすると、私は今頃選択に失敗し、自分にとって全く不向きな職に就いていたかもしれません。大切なことは、岐路に立たされてからでは無く、常にアンテナを張って将来を見据えることだと考えます。実際に岐路に立たされた時、焦りと不安の中で誤った選択を決断してしまうと、後に大きな後悔を抱えることになってしまう可能性もあると思います。これから先、私は様々な人生の岐路に立たされることがあるでしょう。その時のために日頃からその岐路に直面した時の選択を常に意識し、後悔の無い人生を送ることができるようにしたいです。そしてこの体験を通して学んだことをいつか受け持つことになるであろう子ども達にも伝えていきたいと思います。



ノゴマ (*Luscinia calliope* スズメ目ツグミ科)

# 21<sup>st</sup> Century Skills と英語教育

清泉女学院短期大学  
教授 中村 洋一  
(平成4年度修了生)

北陸新幹線の開業がいよいよ近づいてきた。この新幹線による様々な分野への影響・効果が、いよいよ現実味を帯びて検討される時になった。長野県内最北の駅は飯山駅となる。35年前、飯山市にある飯山北高校から、私の英語教員としての生活が始まった。その飯山北高校も、すでに飯山南高校と統合し、飯山高校として生まれ変わるプロセスが始まっている。

飯山北高校では7年前に、北陸新幹線の開業を機に、地域社会が変わっていくことへの危機感と期待感を持ち、教育の分野でのより良い発展を目指し、飯山市中高交流学力向上事業を立ち上げた。その事業のひとつ、「つまずき調査・学習意識調査」のお手伝いをさせてもらっている(事業の詳細については <http://www.nagano-c.ed.jp/iikita/ic/jigyogaiyo.html>)。主に、算数・数学教育において、小・中・高で一貫した教育の取り組みに資する研究・調査や指導法改善の活動を展開し、成果を上げている。

過日行われた2014年度の研究会で、小学校で3桁の割り算を指導する時の苦労話を聞いた。「児童は、割り算の商を立てるとき、大まかな予想をすることが不得意で、さらに、一度立てた商が適切でなかったときに、次のチャレンジをしたがらず、正解を早く教えて欲しいと思う傾向が強い」という話だった。その時、発言の許可を求め、21世紀型スキルのお話をさせていただいた。

「21世紀型スキルの学びと評価プロジェクト (Assessment and Teaching of Twenty-First Century Skills Project (ATC21S)) は2009年1月にロンドンで開催された「学習とテクノロジーの世界フォーラム」において立ち上げられた。シスコシステムズ、インテル、マイクロソフトという世界的なテクノロジー企業がスポンサーとなり、2010年にはオーストラリア、フィンランド、ポルトガル、シンガポール、イギリス、アメリカが参加し、メルボルン大学の評価研究センター内に研究開発本部を置いて活動が始まった(三宅 監訳, p. 1)。ATC21Sのウェブページ <<http://atc21s.org>> を開くと、“It’s not what you know, it’s how you learn” という、このプロジェクトの目指すところを端的に表現しているコピーが目にとまる。

Griffin et al. (eds.) (p. 18) は、Chapter 2: Defining Twenty-First Century Skills で、21<sup>st</sup> Century Skills の構成を大きく4つに分類し、10のスキルを以下のように定義している。

## *Way of Thinking*

1. Creativity and innovation
2. Critical thinking, problem solving, decision making
3. Learning to learn, Metacognition

## *Way of working*

4. Communication

## 5. Collaboration (teamwork)

### *Tools for working*

## 6. Information literacy

## 7. ICT literacy

### *Living in the World*

## 8. Citizenship – local and global

## 9. Life and career

## 10. Personal and social responsibility – including cultural awareness and competence

21世紀型スキルの定義は、「つくり変え続けているもの」であり、「私たちの生活に離れたどこか別世界から与えられたり、私たちの期待とは無関係に育成される(あるいは育成させられる)」ものではない。「21世紀型スキルとは何か、どう育成したらよいかという2つの問いへの答えは私たち一人ひとりがつくり上げていくべき」ものである(三宅 監訳. p. iii)とし、現在においても、上記の「抽象的」な10のスキルを、さらに細分化した下位構成要素として、操作的定義の検討が進められている。文部科学省においても、「求められる資質・能力の枠組み試案」といった検討がなされ、「21世紀型能力は『生きる力』としての知・徳・体を構成する資質・能力から、教科・領域横断的に学習することが求められる能力を資質・能力として抽出し、これまでの日本の学校教育が培ってきた資質・能力を踏まえつつ、それらを『基礎』『思考』『実践』の観点で再構成した日本型資質・能力の枠組みである」という方向性を打ち出している。

さて、算数の商の指導に関わる私の発言である。「大まかな予想をすることが不得意」というのは、*Way of Thinking*の2. Critical thinking, problem solving, decision making の操作的定義に示されている「効果的に推論する」「システム思考を使う」という技能と「根拠のある判断と意思決定を行う」態度・価値・倫理(三宅 監訳. p. 51)に大きく関係するのではないか。また「次のチャレンジをしたがらず、正解を早く教えて欲しいと思う」というのは、*Way of Thinking*の3. Learning to learn, Metacognition の操作的定義に示されている「自分は成功できるという動機づけと自信だけでなく、変化してさらにコンピテンシーを高めようという意欲を支える自己概念」(三宅 監訳. p. 54)が不足しているのではないか。今後の指導における課題としては、正しい「答え」を出すことだけを直接的な目標とするのではなく、むしろ、21世紀型スキルを意識しながら、答えを導き出すプロセスに重点を置く指導が重要なのではないか。つまり、今後この研究会の議論は、算数・数学の学習行動目標の到達に向けた学習を「通して」、21世紀型スキルをどのように学習し、その成果を測定・評価していくかという方法論の検討にシフトしていく必要があるのではないかと提案させていただいた。

そんな発言をしながら、英語教育はどうだろうか、ということも考えていた。数年前から話題になっていた Global Education とか、国際的なグローバル人材の育成について、なんとなく、「それは、英語教育の中で…」といった、国際的 = 共通語としての英語 ⇒ Global Education といい、ある意味単純すぎる捉えられ方をしてきたことが多いのではないかとこの印象を持っている。先日も、スーパー・グローバル・ハイスクールの指定を受けた高校から、「生徒対象に、何か、

関連する話を」と依頼を受けたが、「私は英語の教員で、専門外なので…」といったんはお断りをしたものの、結局は出かけていって、21世紀型スキルのお話をかいつまんで話させてもらったりした。

21st Century Skills の定義の中で、英語教育が育成を担うべきスキルは何だろうか、と考える。Communication があるが、これは、*Way of working* に分類されているのだから、communication in English を含むとしても、同一のものではないだろう。また、周知のとおり、communicative ability と English language ability も、必ずしも同一のものではない。やはり、上記した算数・数学教育と同様、英語の学習を「通して」、21世紀型スキルを学習し、それを測定・評価していく、という方法論のシフトが必要になるのではないだろうか。「英語によるコミュニケーション能力」の獲得に向けた学習も、もちろん重要ではあるが、「そこに留まる」のではなく、英語によるコミュニケーション能力を、*Way of Thinking*、*Way of working*、*Tools for working*、*Living in the World* の中で具現していくための、学習・測定・評価の方法論という観点からの検討が、今、必要なのではないか、と考えている。

21世紀、さらには22世紀に生きる世代のために、英語教育は何ができて、何をすべきなのだろうか。今、教育の global standard の候補のひとつとして、21st Century Skills の検討を継続していくことが重要なのではないだろうか。私事で恐縮ではあるが、今年の4月に初孫が生まれ、「おじいちゃん」になった。あどけない笑顔を見つめながら、この子が大人になる時代に向けて、おじいちゃんは、もうひと踏ん張りするぞ、と思ったりしている。

#### 参考文献

P. Griffin, McGaw B.& Care E. (eds.). (2012). *The Assessment and Teaching of Twenty-First Century Skills*. Springer.

三宅なほみ 監訳. (2014). 『21世紀型スキルの学びと評価』. 北大路書房. [上記文献の日本語訳].

DISCO 人々の「学ぶ・働く」を考える キャリアリサーチ. 「21世紀型スキル」は世界標準の力.(三宅なほみ氏 インタビュー)

[http://www.disc.co.jp/uploads/2012/03/2012.1.10\\_miyakeshi\\_jinzai.pdf](http://www.disc.co.jp/uploads/2012/03/2012.1.10_miyakeshi_jinzai.pdf)

(2014年7月22日取得).

文部科学省. 「21世紀型能力」.

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/\\_icsFilesafielldfile/2013/07/18/1336562\\_01\\_4.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/095/shiryo/_icsFilesafielldfile/2013/07/18/1336562_01_4.pdf) (2014年7月22日取得).



# 校長の眼 ～つぶやき・うたかた～

## 連載 第11回

～言い残しておきたいこと～次代を担う皆さんへ～



苫小牧市立明野中学校  
校長 佐々木郁夫  
(平成4年度修了生)

これまで、3校で教諭、4教育局で指導主事等、4校で校長を務めてきました。飯島編集長から昨年いただいた助言を参考に、私の経験に基づく教訓や日ごろ考えていること等を含めて紙面で伝えさせていただきます。なお、順不同に思いついたことを並べていますのでお含みおき願います。

### その1 教師は facilitator である

古くは夏木陽介、竜雷太、村野武範、中村雅俊といった熱血教師、武田鉄矢扮する金八先生、水谷豊や田原俊彦などが教師役となった学園ドラマがありました。その時代を象徴する内容構成であり、当時の視聴者の関心を集め、教育問題を考える機会になったと思います。比較的最近では仲間由紀恵の「ごくせん」や観月ありさの「夜のせんせい」などもその範疇に入るのでしょうか。私は初任から現在に至るまで、教師はあくまでも生徒のよさや可能性を伸ばす推進役であり、無理矢理引っ張っていくような指導をしないできました。したがって、熱血とは異なる手法を用いてきました。今さら言うまでもなく、教育は人格の完成を目指しており、テストの結果に一喜一憂する必要はありません。どの生徒もやがては学校教育の場を離れ、社会に出て行きます。どうすれば、一人一人の生徒がより良く成長するのか、ここを見極めて働きかけをするのが最大の重要ポイントです。端的に言えば、つかず離れず認め、褒め、励まし支えるでしょうか。

### その2 生徒は担任教師の影響を受ける

我が国では学級を単位にして教育活動が行われます。小中高校では学級担任と生徒との結びつきが非常に強い特色があります。私自身の経験的な見方になりますが、陽気で明るい担任の学級は教室に入った瞬間から元気、活気があります。おとなしく静かな担任の学級は、やはり穏やかな落ち着いた雰囲気を感じさせます。ある教諭が担任すると全く同じ学級を築き上げる場合があります。A教諭が担任するとその学級は見事なほど集中力があり、協力性も身に付き、お互いが仲良く卒業後もクラス会を開き、担任に参加を呼びかけます。B教諭が担任すると判で押したように反抗的な生徒が続々登場し、教室内が乱雑になり、授業は無

秩序、生徒同士が敵対し争います。いったい、これは何を意味しているのでしょうか。温かく許容的な担任は生徒に安心感や所属感を与え、学校での生活を潤いあるものにします。杜撰で公正公平さに欠け、冷たい担任の学級はほどなく崩壊の道を歩みます。そして、上記で例示したA教諭はその後も同じくこやかで安定した学級を築き、B教諭は学級がうまく機能しない状況を繰り返していきます。担任教師の果たす役割の大きさ、生徒への影響力を今一度考え直す必要があります。

### その3 今の時代はだれもが脆く崩れやすくなっている

教職員のメンタルヘルス対策が、重要課題の一つになっています。精神疾患等による休職者数は由々しい状況にあります。教育以外の分野でも心身の異常を訴えて療養に入る人がたくさんいます。これも経験的な言い方をさせてもらいますが、具合が悪くなったら次の3つをすぐに行うことが必要です。「休むこと」「薬を飲むこと」「医師の指導に従うこと」が回復へ向かう3要素です。この3つを実行したある人物は短期間で職場復帰をしました。その際、医師から上司と職場に感謝しなさいと言われたそうです。周囲から見るとあんなに元気だったのに、どうしたのだろうと訝しい気持ちになります。しかし、その人は心のブレーカー（電流制限器）が落ちてしまったのです。手動で戻すことは不可能です。ブレーカーの落ちた人に対する禁句は「がんばれ」です。がんばれないからダウンしているのに、激励してはいけません。私自身、回復困難なダメージを受けて立ち上がれなくなる可能性を持っています。明日は我が身なのです。心身の健全なバランスを崩すのは予期せぬ時に訪れます。そして、私たちは抵抗力が弱くなっており、一気に挫折して立ち直れなくなる脆さがあるのです。他人事と思わず自らの弱さを自覚することが必要です。

### その4 環境が人をつくる

言い古されていますが、真実だと思います。その2でも触れたように自分の生活空間あるいは活動する場所が整理整頓されているか、否かによって学級の風土に影響を与え、大きな違いが出てきます。さて、「上農は土をつくり、中農は作物をつくり、下農は雑草をつくる」という言葉を聞いたことがあります。私が家庭菜園で取り組んだのが土づくりでした。培養土を入れ、有機肥料や堆肥などを3年～4年継続して投入すると、確かに作物の生育に変化が見られ、収穫時の味覚が心なしかよくなりました。同様に人づくりをするには環境を整えることが大切です。環境には家庭、社会、自然などがあります。私たちの周辺を見ると「三つ子の魂百までも」という人物がいる反面、あんなに攻撃的で尖っていたのに成長とともに人格が円満穏やかになり、誰からも好かれるようになっている人物もいます。このような人は自分も努力して自己変革に努めたと思いますが、周囲の人々に恵まれた部分を見逃してはならないです。誰しも温かいまなざしや思いやり、親切な心に触れると優しい心持ちになります。とりわけ、次代を担う青少年に必要なのは身近な人々や世間が受容的、寛容の精神で接することと失敗しても再挑戦できる慈悲と愛情に満ちたぬくもりのある環境づくりが求められます。その環境をつくるのは私たちの役割です。

### その5 今こそ誠実、まじめ、忍耐、努力が大切である

かつて我が国にあった国民性の一つである勤勉や正直といった人として最も尊ばれることが軽んじられる時代が続いています。楽をして儲けようとか、人をだましてお金を取る、違法であっても見つからなければいいとうそぶく良心のかけらもない人々、公共の場であろうと自分中心な行動をするマナーやモラルの欠如した人間がはびこっています。権利は主張するが義務は果たさない、強圧的、高圧的な言動や振る舞いをして我説を通す、傍若無人、自己の利益追求のみに走るといった下品、下賤な行動が国内外で見られます。成人式で暴れたり、社会の危害、害毒になる邪悪な青年を取り上げて報道する必要はありません。たとえ薄給であっても額に汗し、黙々と労働する若者にこそスポットを当てるべきです。死語となった誠実、まじめ、忍耐、努力を賞賛する文化の復興を願います。少なくとも少年少女の教育にあたる教職者として、最低限の人間性を身に付けておくことが肝要です。愚直であってもいいのです。失笑を買っても、頑なに正しい道を歩むことがこの国の混迷と規範意識の欠けた世の中を幾分なりとも改善に向かわせるアヒルの水かきになると信じたいです。

### その6 授業公開は授業者の力量を示す機会である

かつて、ある学校で全員が授業を公開しました。この学校では校内研修が停滞し、お互いの授業を見せ合って話し合う機会が少なかったそうです。そのため、経験年数が長い割りに授業の進め方、指導の仕方が旧態依然としたままの教師がいました。自分では満足 of いく授業ができた。あるいは自分の指導方法は正しい、確かな学力を身につけさせていると自己判断をするのは簡単です。適正な評価を受けるには公開が伴います。公開し批評や批判を受けることによって自身の課題が明らかになり、授業改善をすることができます。授業がうまい、へたにとられる必要はありません。はっきり言って、授業の巧拙は一見して窺い知ることができます。特定の指導技術に走りマニュアルに依存すると、一時的にうまくできた気分、これを錯覚と呼ぶ状況に陥ります。常に手を変え品を変えて、教材研究をすること、学習者の立場を第一に考えて、発問を整理すること、教室段階で展開されるテクニックのみに頼らないことです。300 や 500 の小技を覚えても目指すところの学習内容を理解させ、大目標である人づくりに近づくことは容易ではありません。私が道徳の授業を参観日で公開する際、心がけてきたことがあります。学習者からの感想文と参観者からの授業評価の二つです。そして、感想と評価については通信等を使って公開します。公開し評価を受け、さらに結果を公表します。私は10年前から公開授業をしてきました。幸いなことに批判的な評価を受けたことが現時点ではありません。保護者の意見や感想の中に、私たちが見落としている大切なものの見方を教えてもらうことがあります。

### その7 私たちが見ていけばよいのは生徒である

様々な教育施策や世の中の動きと呼応をして、学校現場には広範多岐にわたる要望、要請の類いが殺到しています。また、昨今取り沙汰されているモンスターペアレント、ヘリコプターペアレントのみならず、地域住民の中からも強烈な攻撃を仕掛けてくる面々がいる時代です。たとえば、我が子に不利益があった場合、躊躇なく学級担任や校長へ苦情を言い、すぐに解決されないと見ると教育委員会、はたまた文部科学省へひどい学校であることを強く訴える親がいるとします。どんなに学校側には非がなかったとしても、悪いのは学校、先生

だと決めつけ、一方的に被害者の立場から学校を責め続けます。このような場合、私たちは保護者への対応に追われがちです。百歩、千歩譲って保護者の立場に立つと我が子の受けた仕打ち、不当と思われる対応などに立腹している場合が多いのです。したがって、子どもの言葉や様子を通して怒りが頂点に達し、マグマのように燃えて悪感情が増幅しています。このようなときこそ、生徒を第一に考えて、その子より良い変容を保護者に示すことが大事です。私たちは、どんなに理不尽な罵詈雑言を浴びせられたとしても、じっと耐え受け止めましょう。もしもその生徒が学校生活に喜びを感じ、家に帰ってから「今日、学校でこんなに楽しいことがあった」「先生が自分のことを褒めてくれた」「今度の行事で頑張るから、見に来て」といったことを親に言うように育てるのです。そうなれば、おそらく敵意と憎しみの対象であった私たちへの視線が幾分なりとも氷の状態から冷水には変わり得ると思います。

吉田兼好が「徒然なるままに…」と書き出したように、私も教職生活が最晩年の今、言い残しておきたいことの一部を原稿にしました。なお、拙稿の掲載は次回をもって完結することを予告し、今回の結びとします。

### 原稿と感想・ご意見の募集

JAELEN では皆様の原稿を随時、募集しております。皆様の近況報告、エッセイ、上越時代の思い出、英語教育に関する話題、過去の掲載記事に関する感想など、お好きなトピックで原稿をお寄せ下さい（飯島博之：e-mail: [ijjima-hiroyuki@spu.ac.jp](mailto:ijjima-hiroyuki@spu.ac.jp)）。

### 編集後記

本号の巻頭記事を寄稿して下さった茂木淳子先生に何でもよいので JAELEN 用にお写真をお送りくださいとお願いしたメールの返信に添付されていたのがアルパカはると君と撮った冒頭の写真です。茂木先生が以前勤務していた大手町小学校でアルパカ飼育を実践された経験を伺ってはいましたが、今も実習中とはどういうことかと思い再度メールでお尋ねしたところ、現在の勤務校でもアルパカ飼育を開始予定とのこと。また、茂木先生の転勤先に限らず、アルパカの魅力を知った県内外の複数の小学校が既にアルパカ飼育を始めているとのこと。長野から新潟にかけての小学校はアルパカだらけになるのではと思いをめぐらし、大学の研究室で一人微笑んでしまいました。公立小学校でアルパカに触れられる児童たち、なんて幸せなんでしょう。小学校にいる動物は金魚、ウサギ、セキセイインコくらいだというのが私の様な凡人の固定観念ですが、アルパカを飼おうという発想に脱帽です。この発想の豊かさが茂木先生の英語教育の魅力の一つなのだろうと想像しています。新潟で英語教育に熱心な小学校を見学する機会がありましたら、校庭のどこかにアルパカがいる可能性大です。（編集委員 H. I.）

---

2014年9月5日発行

発行者 上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子（上越教育大学）

野地美幸（上越教育大学）

飯島博之（埼玉県立大学）

---